

「和久里融通大念佛狂言」の基礎的研究

人文科学科 村上 美登志

I、研究目的

本研究は、これまで全くといってよいほど研究の進展していない、融通大念佛狂言の全貌解明を目指すものである。また、現在も福井県小浜市和久里の西方寺に伝えられ、これまで不明とされてきた「和久里融通大念佛狂言」独自伝承曲の特殊性解明にも及ぼうとする。

II、研究内容

京都の三大狂言（「神泉苑狂言」を合わせて四大念佛狂言ともいわれる）は、「壬生（融通大念佛）狂言」を筆頭に、「ゑんま堂狂言」・「嵯峨狂言」を指している。「壬生狂言」の影響を受けて成立し、やがて廃絶するが復興して現在も上演されているものなどを併せると、下記に掲げたように調査の限りでは、全国の五通寺に伝わる（この内、壬生寺直接の影響あるいはその指導下にあるのは、神泉苑、和久里西方寺と近年の指導にかかる尼崎大覚寺の三寺である）。

- ① 「千本ゑんま堂狂言」 五月一日～四日 京都市・引接寺（「千本ゑんま堂大念佛狂言」）
- ② 「嵯峨大念佛狂言」 三月十五日、四月の第一、二の土日 京都市・清涼寺釈迦堂
- ③ 「神泉苑大念佛狂言」 五月一日～四日 京都市・神泉苑
- ④ 「大覚寺壬生狂言」 二月三日 兵庫県尼崎市・大覚寺
- ⑤ 「和久里壬生狂言」 四月中旬の金～日（六年毎の開催） 福井県小浜市和久里・西方寺（「和久里融通大念佛狂言」）

この内、「壬生狂言」の影響下に成立した和久里の西方寺に伝承される曲目は、次の九曲である。

- ① 狐釣り（釣り狐） ② 腰祈り ③ 寺大黒 ④ 愛宕詣り ⑤ 餓鬼角力 ⑥ 炮烙割り
- ⑦ 座頭の川渡り ⑧ とろろ滑り（山端とろろ） ⑨ 花盗人

ここで注目されるのが、本家本元の壬生寺や他社寺には現在、存在しない「和久里融通大念佛狂言」の上演曲目である。それは、①の「狐釣り」、②の「腰祈り」、⑦の「座頭の川渡り」の三曲である。

これらの曲目が他社寺から消えた理由として、差別に繋がるので壬生寺から外されたとするものと、逆説法じみて内容がよく分からなくなって人々の共感を得られなくなったからではないか等と考えられてきたものであるが、①の「狐釣り」は、所謂「雑狂言」とか「集狂言」のジャンルに分類されており、通常「釣り狐」と称されるものである。この「釣り狐」は壬生寺では、すでに江戸時代中期頃には廃曲になっているが、壬生寺の現行曲目である「玉藻前」の中で、この内容は伝えられている。すなわち、それは獵師と獵師の伯父に化けた古狐とのやりとりであり、その中味のカタリのほとんどが「玉藻前」である。したがって、あまりに重なるところが多いので、壬生寺では重複を避けて廃曲となり、「玉藻前」を持たない和久里に、「狐釣り」が残ったのだと考えられる。

次に、②の「腰祈り」は、「山伏狂言」のジャンルに入るもので、「能狂言」の中にこの曲目はあり、よく知られているものの一つであるが、和久里では登場人物の老翁が老女に変わっており、能狂言の「腰祈り」にはない老女の「立小便」が加えられていて、観客を沸かせている。しかし、壬生寺では現行曲目である「大原女」の中で母親が「立小便」をするので、これも上述したものと同じく、重複を嫌って、壬生寺の番曲から外された可能性の高いことが考えられるのである。

最後に、⑦の「座頭の川渡り」であるが、壬生寺で廃曲になる以前の古記録には、曲目名が「盲の川渡り」とされていたことが判明する（和久里での登場人物である「供の面（奴面）」は、壬生寺の「阿保面」を付け、

壬生寺が白足袋であるのに対して、和久里では黄色い足袋を穿いている。また、和久里では、「供」といわずに「奴」と呼び、両手両足の運びが特殊で、それは當麻寺において「お練り供養」をおこなう佛達のそれに酷似していて、興味深いものとなっている。

これは、「座頭狂言」のジャンルに分類されているもので、内容から見ると、この⑦の「座頭の川渡り」は、「井碓」と「月見座頭」の酒、「鞠座頭」の三つの要素を取り入れている。

古い形の狂言では、狂言の約束事として、盲人は晴眼者にいたぶられ、夫は妻に追い立てられるのが普通の形である。見どころとしては、いたぶられた座頭の達観した境地、この世の宿命の悲しさ等を表現しているのだが、江戸時代中期頃に差別を理由に、壬生寺から該曲が消えたとする説明はいかにも苦しい。すなわち、倫理観の変化に伴う廃曲というよりも、壬生寺が江戸時代中期頃に未曾有の流行をみた「夜討曾我」などの、所謂「曾我物」の物語等を演目に取り入れていく中で、今一つ人気のない該曲が外されていったと考えるべきであろう。

また、「和久里融通大念佛狂言」は、六年毎の子と午の年に奉納される。演目内容を整理して、下記に掲げてみる（奉納年によっては、時間等の変更もある）。

初日〈午前〉「餓鬼角力」「花盗人」「炮烙割り」

〈午後〉「とろろ滑り」「座頭の川渡り」「愛宕詣り」(宝塔縁起奉読)「狐釣り」「腰祈り」「寺大黒」

中日〈午前〉(宝篋印塔供養)(大般若経奉読)(宝塔縁起奉読)

〈午後〉「とろろ滑り」「狐釣り」「腰祈り」「炮烙割り」(宝塔縁起奉読)「寺大黒」「餓鬼角力」「花盗人」「座頭の川渡り」「愛宕詣り」

楽日〈午前〉「寺大黒」「座頭の川渡り」「愛宕詣り」

〈午後〉「狐釣り」「花盗人」「腰祈り」(宝塔縁起奉読)「炮烙割り」「とろろ滑り」「餓鬼角力」

この番組内容からも理解されるように、初日の冒頭と楽日の最後の演目が「餓鬼角力」であるのは、「和久里融通大念佛狂言」の本質が、「施餓鬼会」を明確に意図したものであることが理解できる。

さらに、「宝篋印塔供養」を含め、「宝塔縁起奉読」が三日間で五回も奉納されている。これは、この地方の代官であった長井雅楽介が、出家を果たし、朝阿弥(沙弥朝阿)と号して、延文三年(一三五八)に建立した宝篋印塔(通称市の塔)の信仰に関わるものであったことが判明する。

Ⅲ、研究成果とまとめ

和久里にのみ伝承される番曲は、本寺壬生寺が、大衆の嗜好や時代時代の流行に合わせて番曲を変更して行き、多くの曲目を取り入れ過ぎたがために、重複も目立ってくるようになり、つねに整理・入れ替えを繰り返していたが、これとは対照的に元来、多くの番曲を持たない和久里は牢固として原初の形を守ってきたと言えよう。

また、この和久里の「融通大念佛狂言」を大きく捉えると、本質的には「施餓鬼会」の開催を目したものであろうが、その中に古くから地元の信仰を集めていた「市の塔」の供養を絡めているものでもあった。それは、初日・中日・楽日の午後に、市の塔に対する「宝塔縁起奉読」が計三回組み込まれ、さらに、中日午前には、「宝篋印塔供養」と「宝塔縁起奉読」が行われ、三日間で五度に亘って、市の塔の供養が成されていることから明らかとなる。

参考文献

一) 村上美登志「『壬生狂言』追跡——和久里融通大念佛の場合——」(『軍記物語の窓』第三集、和泉書院、平成十九年十二月)。

二) 村上美登志「『和久里融通大念佛狂言』の世界——祈りの形象——」(『立命館文学』第六一八号、立命館大学人文学会、平成二十二年十月)。

附記 本研究は、平成二十一年度～二十五年度に亘り五年間採択された、科学研究費補助金「基盤研究(C)一般」の内、平成二十一年度～二十二年度における研究成果の一部である。